

# ニュースアイ

## 借金、失業、交通事故、犯罪…

# 依存薬物す狂わ



覚せい剤や大麻など薬物の乱用を繰り返して、やめられなくなる「薬物依存症」。本人の心と体をむしばむばかりか、周囲にも精神的、経済的に深刻な被害をもたらす。最近では「脱法ハーブ」の乱用が若者を中心に広がりを見せる。今年で結成10年を迎えた「県薬物依存症者を抱える家族の会」の会員は実感を込めて言う。「依存症は一生完全に治らない病気。絶対使ってはならない」

(報道部・小熊隆也)

同会の世話人、小西憲 続く。

さん(64)は長岡市には忘れない光景がある。15年前、東京の専門学校に通っていた当時19歳の長男(34)と連絡が取れず直接アパートを訪ねた時のこと。

足の踏み場もないゴミの山。水道は止められトイレは汚物だらけ。家具や電化製品が一つもない。顔はやつれ、明らかに普通ではなかった。

医師の診断は薬物依存症。覚せい剤を貰う金ほしさに家具などは全て売り払っていた。「まさか自分の息子が…」。絶句した。実家に連れ戻した

失業…。薬物依存症はさまざまな問題を引き起こす。家庭内暴力、引きこもりなど、家族の人生を変えらることもある。

リストカットに薬の処方される睡眠薬も使い方を誤れば依存症になり得る。そして脱法ハーブ。陶酔、興奮作用がある化学物質を、乾燥させた葉に混ぜたもので「お香

た。意を決し、息子がなどとして販売。数百円程度のももあり、若者でも簡単に購入できる。

小西さんの長男は昨年6月、脱法ハーブに手を付いた。ダルクでリハビリ

旬のニュースや地域の課題、身近な出来事を記者の視点で掘り下げるNEWS EYEのコーナーへ、情報やご意見を寄せてください。〒950-1189 新潟日報社報道部「企画報道班」まで。ファックスは025(378)9540。メールはeye@nigat-aiippo.co.jp

群(クラッシュ・シンドローム)を発症、足の一部が壊死した。後遺症で現在も松葉づえが手放せない。

薬物は1度でも使わない、使わせないことが何より重要だ。ただ、もし家族や友人が薬物を使い始めたなら、どんな変化が現れるのか。

薬物依存に詳しい新潟医療福祉大の近藤あゆみ准教授によると、言動が攻撃的になったり、態度がコロコロ変わったりする

小西さんの長男は現在、生活保護を受け東京のアパートで一人暮らし。福祉作業所で働ながら、薬物依存からの回復と自立を目指している。

## 危険性身近に潜む

### 市販薬 誤用でも

りを続け、薬物を断つてから約5年がたっていた。使用後に意識を失い、身体圧迫による挿滅症候

「薬を使わない一日を積み重ねてほしい。それしかない」。小西さんはただただ願っている。

## 鍵への復

あすフォーラム  
家族の会が長岡で

90(8723)371  
5。

「薬を使わない一日を積み重ねてほしい。それしかない」。小西さんはただただ願っている。

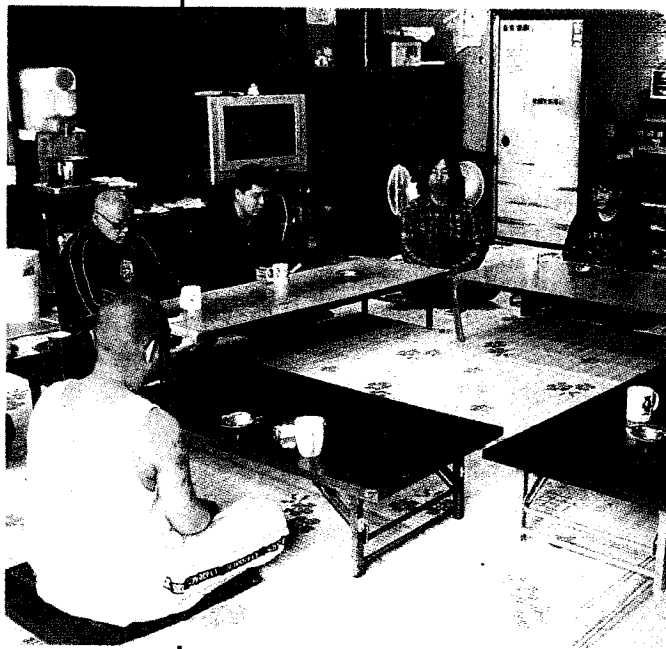
# NEWS EYE

# 人生

薬物依存症者が社会復帰を目指し、共同生活を送る民間のリハビリ施設。それが「ダルク」だ。仲間同士、過去の体験談を語り合い「薬をやらぬ一日」を積み重ねる。

5月末、20〜60歳代の男性約30人が入居する「磐梯ダルク リカバリーハウス」(福島県北塩原村)。元温泉旅館の大広間で入居者たちが向き合う。日課のミーティングだ。

「小学4年の時、先輩にシンナーの袋を口に当てられた。クラクラした感覚が気持ちよく、そこから癖になった」。茨城



## リハビリ施設「磐梯ダルク」

れ100針以上縫った。高校は強制退学。「狂ったように吸っていた。今は後悔している」

静かに聞き入っていた別の入居者が順番に口を開く。「薬ほしさに親の

## 後悔語る入居者たち 第二の人生へ笑顔で夢も

は強調する。「過去を正直に洗いざらい話し、その経験を分かち合うことが大切」。気持ちが楽になり、冷静に自分を見つめられるという。

ダルクは1985年、

ダルクに来て2年半がたったジュンさんは笑顔で夢を語る。「薬の欲求に耐え、自分を変えたい。仕事を探して社会でまっとうに働き、第二の人生をやり直したい」と訴える。

ダルクに来て2年半がたったジュンさんは笑顔で夢を語る。「薬の欲求に耐え、自分を変えたい。仕事を探して社会でまっとうに働き、第二の人生をやり直したい」と訴える。

県出身のジュンさん(34)は打ち明ける。高校1年でシンナーを吸いバイク事故を起こした。脚と腹の肉をえぐら

形見を質に入れた「今も薬をやりたい時がある」。生々しい言葉が続く。施設長の林潤さん(40)は東京で初めて開設された。現在は全国に約60カ所ある。本県では田上町で設立に向けた準備を進めているという。

「依存症は完治しなくても、回復して社会復帰できる」と林さん。「依存症者」「犯罪者」というレッテルを貼らず、就労支援などで社会が回復者をバックアップしてほしい」と訴える。

薬物依存の体験を語り合う「磐梯ダルク」の入居者たち。薬物と決別するため毎日ミーティングを重ね、自分自身と向き合う。福島県北塩原村

## 早期介入が回

える家族の全...は10日午前10時から、設立10周年の「県薬物依存症フォーラム」を長岡市のアオーレ長岡で開く。

依存症者の回復施設「ダルク」創設者の近藤恒夫氏らが講演。依存症者と家族による体験談の発表もある。問い合わせは小西憲さん、0

### 相談機関、団体の問い合わせ先

- ・県精神保健福祉センター 025(280)0113
- ・新潟市こころの健康センター 025(232)5560
- ・県薬物依存症者を抱える家族の会 090(8723)3715 (小西憲さん)
- ・磐梯ダルク リカバリーハウス 0241(33)2111

## 取材メモ

胸締め付ける 壮絶な経験談

「売人と一緒に暮らした四六時中覚せい剤を使っていた」「車でガスを吸っていたら、たばこの火が引火し大やけどを負った」

「磐梯ダルク」入居者が包み隠さず語る壮絶な過去。胸が締め付けられ、肩間にしわを寄せながらメモを取った。

薬物依存症はどこかで「自分には関係ない世界の話」と思っていた。でも市販薬は使い方次第でその危険を招き、脱法ハーブは小学生のおこづかいでも買える。薬物依存に陥る危険性は、身近に潜んでいる。

ダルク入居者の一人は「最初に味わった快感が忘れられずに、薬を使い続けた」と語った。たった一回が命取りになる。乱用防止の強い思いを、社会全体で共有し続けなければならない。